童話

何故さう物語（一）

——ラットヤッド・キプリング——

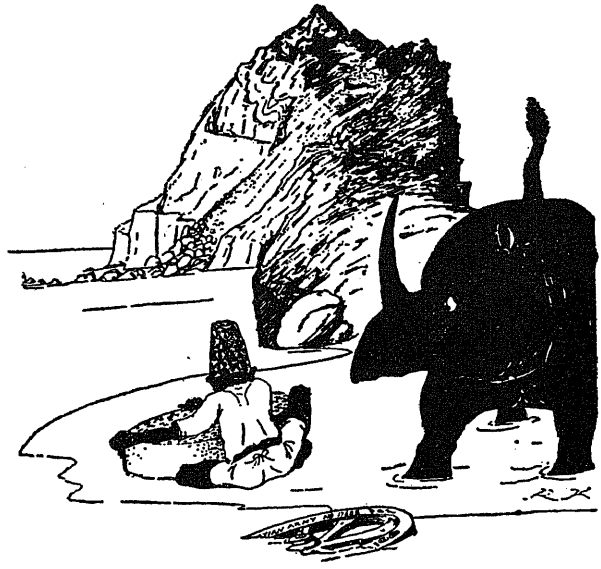
中野好夫譯

一、何故犀に皮が出來たかといふお話

昔、昔、大昔、遠い遠い南の海のある無人島に一人の魔法使ひが住んで居りました。魔法使ひは頭に眞赤な帽子を被つて居りましたが、不思議なことに、この帽子はお陽樣の光を受けると、まるで寶石で出來てゐるかのやうにキラキラ輝いて見えました。そして帽子の外には、持ち物といつてはナイフを一本と奇妙な恰好をした大きな七輪を持つてゐるばかりでありました。ところで、ある日のこと、魔法使ひは小麥粉と水と乾葡萄と李とお砂糖とで御馳走のお菓子を燒きはじめました。直徑（さしわたし）が二尺もあつて、それに厚さが三尺もあらうといふ、それはそれは途方もない大きなお菓子でありましたが、それがまた、とても素晴らしく美味しいのです。（サア、そこが魔法使ひなのです）、魔法使ひは小麥粉と水と乾葡萄と李とお砂糖とを練り交ぜてこさへたお菓子を、やつとこさと七輪にかけました。お菓子はだんだん燒けて來ます。やがて、こんがり狐色になつて、それはそれは美味しさうな匂ひが、プーンとして來ました。いよいよ魔法使ひがでは御馳走にならうといふその時、島の奥から大きな一匹の犀がノソリノソリと海岸の方へやつて來ました。皆さんは犀を知つてゐますネ。あの大きなまるで箱舟のやうな恰好をして、皺だらけの厚ぼつたいダブダブの皮の外套を著た犀を知つてゐますネ、豚のやうな可愛い小さい目が二つ、それにお鼻の上から大きな角が一本、ニューッと突き出てゐますネ。さうです、さうで

す、あの犀です、お行儀の悪い奴でせう。ところが、その頃は、――さう、さう、このお話はまだこの世界が出來て間もない時分のお話ですよ。よろしいか。――その頃は犀の皮はピッタリ身體にくつついてゐて、何處を見ても今のやうにあんな皺なぞはちつともありませんでした。尤ももつともつとずーつと大きくはありました。けれども今も昔も同なじことで、ほんとにお行儀が悪かつたのです。今もお行儀はよくありませんでせう。これからも――駄目でせうネ、きつと。ところで犀はわめくやうな大聲で、『やあ』と魔法使ひの後から聲をかけました。不意を食つた魔法使ひはお菓子も何もうつちやらかして、狼狽てゝ傍の椰子の樹の天邊へ上りました。頭には例の眞赤な帽子を一つ被つたばかりです。帽子といへば、あのお陽樣の光があたると、キラキラ光る不思議な帽子でしたネ。そこで犀の奴はノソリノソリとやつて來ると、いきなりお鼻で七輪をゴロンとひつくり返してしまひました。可哀相にお菓子はコロコロと砂の上に轉がりましたが、犀はそのお菓子をお鼻の上の大きな角でヒョイと突き刺して、そのまゝ尻尾を振りながら、またノソリノソリと島の奥へ歸つて行つてしまひました。やがて魔法使ひは椰子の樹から下りて來ると、七輪を起して、それからお陽樣の方を向いて、魔法の呪文を大聲に三度唱へました。――モレカモデレタ、モレカモデレタ、ツヤルトルオシワク――皆さん、お解りになりますか。解りません？、ぢや私が日本語で言つて上げませうネ。その意味は、『魔法使ひの燒いてゐるお菓子を盜んで行つた不屆者は天罰立ちごころに到るべし』といふのだそうです。

サア、大變でした。それから五週間たつた後のこと、南の海一帶に焦げつくやうな暑さがやつて參りました。みんな誰れもかれも着物も何にもすつかり脱いでしまひました。無人島の魔法使ひも到頭眞赤な帽子を脱ぎました。それからあの犀も、到頭我慢がしきれなくなつて、皮の外套を脱いでしまつて、それをばヒョイと肩に引掛けて、水浴びに海岸へ下りて參りました。さうさう、忘れてゐましたが、その頃の犀の皮はスッポリ頭から被ると、お腹のところで三つボタンでパチンとめられるやうになつてゐて、丁度あの防水服みたいだつたのです。犀は魔法使ひの前と相變



らずノソリノソリと歩いて行きました。無論あの魔法使ひのお菓子はとつくの昔にペロリと食べてしまつてゐたのですが、一向何食はぬ顔で、ケロリとして魔法使ひの鼻つ先を通つて行きました。そして大事の皮の外套を水際に殘したまゝ、ヂャブヂャブと入つて行つて、お鼻の先だけ水の上に出してブクブク大きな泡を吹いて居りました。何しろお行儀こいふことは、今も昔も、これから先きも、一向に知らないのですから仕方がありません。

まもなく魔法使ひは海岸へやつて參りました。そして犀の皮の外套を見つけると、眞黑な顔にニヤリと一つ笑ひました。とそのニヤリはさも嬉しさうに眞黑い顔中をクルクルと二度驅けまはりました。それから皮の外套のまはりを三度雀躍りしながらグルグル廻つて、蒼蠅のやうに兩手を擦つて躍り上りました。それから大急ぎで自分の小屋へとつて返して、眞赤な帽子にお菓子の粉屑を一杯に詰めてみました。皆さん、よく記憶してゐて下さい、よろしいか、この魔法使ひはお菓子の外には何にも食べない上に、自分のお家を一度だつてお掃除したことがないのださうです。そこで例の皮の外套をソーッと取り上げると、帽子の中の粉屑をすつかり打ちまけて、あの古い、乾いた、ボロボロの粉屑や燒け焦げの乾葡萄が一面にくつつくやうに、力一杯ゴシゴシこすりつけました。さて、そしらぬ顔で外套を

元の場所へ置くと、魔法使ひは傍の椰子の樹の天邊へ上つて、早く犀が水の中から出て來て、皮を著るのを待つて居りました。

何も知らない犀は、やがて相變らずノソリノソリと海から上つて參りました。そしていつものやうにスッポリ外套を被るとそのまゝバチンと三つのボタンをはめてしまひました。

ところで、皆さん、あなた方は寢床の中に菓子屑が落ちて居る時のことを知つてゐますか、丁度そつくりあれなんです。暫くすると犀は身體中がなんとなくむづかゆくなつて參りました。だから犀はなんとかして搔かうと思ふのですが、それが困つたことには、搔けば搔くほど、一層ひどくかゆくなるのです。サア、困つた!!そこで今度は砂の上にゴロリと横になつて、無暗矢鱈にゴロゴロ轉がつて見ましたが、これもいけない。轉がれば轉がるほど、かゆくなるばかりです。今度は仕方がないから、椰子の樹のところへ行つて、狂氣のやうに身體中を幹にこすりつけてみました。やつぱり駄目でした。その代り餘りひどくこすつたものですから、肩のところに大きな襞が出來てしまつたのです。それからいつもボタンをはめてゐたお腹のところにもまた一つ大きな襞が出來てしまひました。(ボタンは?といふのですか。そうです、ボタンはこの時にすつかり摩り落ちてしまつたのです)。その上にまだたまらなくてこすりつけたものですから、兩脚にもまた襞をこしらへてしまひました。犀はすつかり疳癪を起しました。といつてそれで肝腎の粉屑がどうなるといふのではありません。粉屑に相變らず皮の下に殘つてゐるのです。そしていつまでもいつまでもむづむづしてゐるのです。犀は家へ歸つて參りました。ひどくプンプン腹を立てゝ居ります。そしてまだ眞赤になつて狂氣のやうに身體中を搔きむしつて居ります。皆さん、解りましたネ、その日からといふもの、犀といふ獸はあなた方が御存知のやうに身體中が大へん皺だらけで、それに大へん氣むづかし屋なのです。それもみんな何故かと言へば、あの厚ぼつたいダブダブの皮の外套の下に今でもなほお菓子の粉屑がそのまゝ殘つてゐるからなのですトサ。

(おはり)